

『おや怒つたの』

『金は取られる、こゝでは追出される、今日は悪日だ』

『あれ怒るもんじや無いよ、勘忍してね』

『じや一服ぐらゐは恵んでやりなせね』

阿大はぎつかき腰を下して、煙草の白い輪を吹いた。

『處で話は又後へ戻るんだがねわ』

『.....』

『今の一件さ、叶ふまいかね』

『さうだか知らないよ』

『是れは、手厳しい肱鐵だ。こゝら邊りは危いぞ』

『そんな事云つちや姐さんに云ひ附けますよ』

『ほい、來た速射砲だ』

以ノモ後、

二組の者、

其ノ者、

不倫

『あれそんなに近づいちゃ仕事が出来ないじゃないの』

『いゝじやないかね、そんな仕事はさうでも』

『あれ嫌よ、そんな事をしてさ』

『生娘じやあるまいし、たまにや變つた男の手も取るさ』

阿大は若干の小洋をぐつみ女の手に握らせた。

『おや、是れはなあに』

『おい聞くのは野暮だ。仕舞つて置きな』

『でもそれじや濟まないわ』

『濟むの濟まぬのつて争つちや夜があけらあね』

阿大は女の背中から廻した右の手で、ぐつみ軟かい左の二の腕を掴んだ。女は上氣した林檎のやうな頬を俯垂れて、左の方に丁字形に對した男の胸へ、黙つて凭りかかつた。

阿大は左手を女の内懐深く挿込んで、大きく熱い一息ついた。女は糸の様に眼を細めたまゝ、息を殺した。

『おや話せそうだねわ』

『あれ後生だから、手荒な事をしないで頂戴ね』

『籠棒め、乗りかゝつた船つて事を知らねわか』

『駄目よ、駄目よ、其れ迄解いちや』

『脱がねいじや、話せないじやねわか』

『でも、あの人歸つて来ないか知ら』

『大丈夫だつて云ふに』

『あれ、そんなことするもんじやないよ』

『いゝてねことよ、お前と俺だけの間じやねわか』

『あら非道いわ、そんなこと』

三

かの女は服くなつて、小灯の火を『ふつ』と吹き消した。

『おや、こりや非道いねわ、闇に鐵砲さいふ圖だね』

麻雀の勝負は白熱した。札握る手にもじつこりこ汗ばんで、血走つた眼を皿のやうに、茲を先途と熱中したので、和子は顔勢を盛り返した。

『やあもう歸ねるのかい』

『おい失敬するよ』

『勝ち遁けよ、来たね』

『籠棒め、勝つもんけえ』

『いやまあ何でもよいてね事よ』

『又の勝負だ』

朧の影は藁屋の軒から高く上つて、淀んだ水面に真圓い影をほつかり浮べて居る。靜かに水の揺ぐ毎に、金龍の尾さなり、明珠の破片と碎けて、心もち冷りこする夜氣が足許に應ひて來る。黒く聳れた對岸の高い工場の建物の其の無數の窓が明く道を睨んで、惡魔の面を想像される様に感じられる。然も其の窓を洩れて、地響きのする唸りが、胸を壓する様に聞ゆるのには凄絶な氣分を遁れるわけには行かなかつた。和子は道すがら、懷に手を挿し入れて、月明りに勘定して見た。元を差し引いてまだ幾らかの勝ち日になつて居るのがもつつけの幸であつた。彼は人知れずニヤリと笑つて、財布を仕舞ひ込んだ。

朦朧睡夢見情郎、

同衾枕摟抱成雙、

風打船窓、驚醒來時呀、

好不悽吓悽吓悽凉况……………

こ、低く口ずさみつゝ藁屋へこ歸つて行つた。四邊は今靜かに眠りに落ちて、夢驚かされた水鳥の羽音のみが獨り寂寞を破つた。百勝を擡げたやうな亂雜な部落の苦の屋根にも、月は滿遍無く優しい光を別けて、干し忘れた白い襦袢衣が物言ひたけな姿勢で行く手に吊り下けて居る下をくぐつて、我家の戸を叩いた。藁苞の扉を開けるこ、燻り臭さこ、濕り臭さこ、人の身體の蒸しいきれたやうな氣が、一所になつて、ブンと鼻を衝く。それでも彼に取つてはそれが何よりの懐しい我家の香りであつた。暗やみの中から若い妻の白い艶やかな顔が、さしこむ月明りに見えた。

『おつこ、歸つたよ』

『何だね、遅くまで』

『たまにやいゝじやないか』

『何がたまなもんかね』

『まあいゝや、一杯くんねえ』

『おや、およしよ、何時だと思つて居るの』

『何時でもいゝじやないかね』

『冗談じやないよ、待つ身になつて見るがよい』

『ほい、これは耳よりな、待つ身だつてね』

『さうよ、甚那に待つた事かい、阿呆らしい』

『へん、白ばれるない、おやぢの留守が幸だつたよ云はなかつたね』
ギグリミした胸を抑へて、

『嬢に内所だつて云はなかつたかね』

『篋棒め、嬢に遠慮が要るかい』

『だからさ、勝手にするがよいよ云ふんじやないか』

『いや、眞闇じや話せねえ、小灯つけろ』

『およしなさい、何時ですかい』

『じや瓶を遣せ』

高粱の瓶を喇叭に一こ溢りして、

『ゲーッ、よい鹽梅じや、腹の底まで浸るわい』

手探りに、臥床の中へ腕をさしのべて、ほかりこした、暖か味をむさほるやうに
撫りつゝ、

『おや、畜生、白河夜船で居やがつて、待つてましたも凄じいや』

『だつて、横にでもなつて居なくちややり切れるものかね』

『へん、馬鹿にして居やがらあ』

『へん、さつちが馬鹿にするんだかね』

『何だつて』

『雞の鳴く時分にのそく歸つて来てさ、よくもそんなにづけく言はれたもの
だ』

『もう一遍云つて見ろ』

『幾だつて云つてあけらあね、又敗けて來たんだらう』

『笹棒め、人の顔さへ見りや、敗けたかミ呷かしやがる、縁起でもねわ』

『おや、珍しい事、勝つたのかい』

『あたり前よ』

『大層な險幕だね』

『へゝん』

『じや忘れぬ内に、此間の錫箔の手間賃を返して貰はうねエ』

『馬鹿野郎、そんな金がどこにあるかい』

『じや、やつぱり取られて來たんだね』

『まあいゝや』

『まあいゝやでは、濟まないよ』

『じやさうするだ』

『はゝん、讀めた』

『何が』

『勝つた事は勝つたけれども、嬬に内所だからね、ミか何ミか云つて、白い手に奉つて來たのだらう』

『笹棒め、今何時だと思つてゐやがるんでえ』

『そりや、こちらの云ふことさ、だから早くお寢み云つて居るんじゃないの』

『じや寢むじやうか』

『おや怪しからん。この腿帯は誰のものだい』

阿大の括り忘れたものを、掴み上げて、妻の胸に突きつけた。ギクリミして、血の流れも止る位に驚いたが、彼女は務めて平氣に装ひ、又暗闇であるのを幸に、

『誰の物でもありやしない、お前さんの仕事用の物じゃないか』

聲は顔わて居たが、和子には氣づかれなかつたやうであつた。

『じゃ、始末して置くさ』

『おや變に濕つほくなつて居るじやないか』

『贅澤言ふもんじゃないよ』

『まさか小便じやあるまいね、ハツハツ、……………』

『オホオホ……………嫌だよ、この人は』

『じやそれ用意だつ』

『云はなかつたつて、解つてゐるよ』

四

『時にお前幾つだつたけね』

『あれお呆けでないよ』

『二か、三か』

『さちらだつて、いゝじやないの』

『早いもんだねわ』

『こんな晩だつたわね』

『何が』

『知らないよ』

『何を思ひ出したのだ』

『妾本當に殺されるんだと、思つたよ』

『ふん、あの時の事かい、つまりねわ』

『でも妾は一生お前さんを怨むわよ』

『おう、恐しや』

『随分泣いて手こづらしたつけねね』

『わゝ、今でも泣いて居るわよ』

『ほゝゝ、随分恐しい執念だねわ』

二人は又浸みくゞ結婚當時の思ひ出に耽つて、彼女は慮ね難い遠い過去の古きづを回想して見た。

*

*

*

*

*

鹽城縣の搖籃を巢立して、遙々江南の地に移り住んだのは一昔も前の事で、何でも彼女の末だ十二三の時の事であるから、明瞭な當時の記憶は段々薄れてしまつたが、海門を出て、吳淞に通ずる汽船を見ては全く驚いた。廣々とした長江の水にも驚いたが、未だそれよりも、煙を吐いて水の上を走る鐵の家には全く度膽を抜かれてしまつた。それから、話には聞いては居たが、始めて上海の街を見せて貰つた時

には、天に届くやうな宏壯な家が道の兩側に並んで居るのを見た。其時、あの上の方に昇るのには、甚那に長い梯子をかけるのだらう。毛唐さんは大した物を拵ねたもんだと頼りに感じたものだ。それより未だ驚いたのは、火を吹いた怪物が野も、林も、人家のけじめも無く、凄じい響をたてゝ、長々しい胴體を唸らし乍ら走つて行くのを見た時には、全く顔の色を變れてしまつた。それが汽車と云つて、人を乗せて走る、交通機關である等とは、全く思はれなかつた。今でも見る度に不思議に思ふのは、電車とか、自動車とか、云ふものが火も燃かずに、凄じい速さで走つて行くのが、彼女には不審でならなかつた。

彼女は追々、友達も出来、土地にも馴れた頃、友達や兩親に憑められて、紡績と云ふ所に日稼ぎに出された。そこでも、大きな機械が獨りで廻るのを見て、驚いた。殊に、饅餡の様な綿の紐が木管と云ふものに巻かれて、それが又、一つ／＼ほゞけて機械の鐵管と鐵管との間へ喰ひ入つて出て来る時には、素麵の様に細くなつてゐ

た。それが又、一つの不思議な種であつた。其の素麵をもう一度他の機械に掛け替へて、やつぱり鐵管と鐵管との廻る間から春雨の烟るやうに何百本の糸になつて、小さい木管に巻き取られてゐた。

自分等の使ふ糸云ふものは、恁んな事になつて、出来るのか云ふ事も初めて知つた。始めは糸を繋ぐのは中々面白いと思つたが、それが、段々馴れて來るに、監督様の目を偷んで、遊ぶ事も覺わつた。然し、毎日くゞの稼ぎ高が通帳に、赤い丸い版になつて、増へて來るのでそれを楽しみに長い労働も、大した苦にはならず、休まぬ勤めたものであつた。

そして、段々仕事の要領が解つて來るに、自分の台の柵の上に積まれた、糸の原料なる、粗糸云ふ物の良し悪しに依つて、機械の調子が又大そう違ふこと等を知り出して、争つて、良い篠卷を集めて、其日の仕事を樂にする様な段取りをする様にもなつた。

處で、機械に油を注して歩く男工さんの若い方が、彼女に親切にして、いつも良い粗糸を積んで呉れたのが非常に嬉しかつた。彼女は其の男工さんにさうして御禮してよいかと、心の中で手を合して感謝して居つた。

或る天氣のよい午後であつた。工場は都合で早仕舞ひになつたので、血の様な色を染めて西に白づいて行く赤い光を受けて、長い黄色の蔭を地に横たへ乍ら、獨り淋しく家路に向つた時、ふと後から名を呼ぶ人があるので、振り返つて見るに、それは紛れも無い、注油方の男工であつた。一緒に行かうと、請がまれて恥しい乍ら、同伴したが、今から考へるに、其の男工の家路の方で無い方向を私と一緒に行くのは合點の行かぬ事であつたが、氣もつかずに、淋しい野原を相携へて行つた。

其の人が、さある墓地の蔭に腰を下ろして、煙草の煙を輪に吹いて動かうともしないので、日は段々暮れて行くし、泣き度くなる程困つてしまつたが、それでも早く参りませうと思ひ切つて言ひ得無かつたのが残念であつた。其の男は、じろく

ミ、彼女の顔を窺き込み乍ら、年は幾つか、両親はあるか、兄弟が有るか、等ミ、妙な事を尋ねるのであつたが、何の氣も付かずに返事をして居つた。

聽て、其の男は言ひ難くさうに口籠つて居たが、思ひ切つたミ云ふ調子で、

『俺の嫁さんになつて呉れんか』

ミ、言ひ出した。

彼女は自分の耳を疑つた。然し、全く真剣になつて詰め寄つて来る男の顔が凄い物に見えた。

もう日はこつぷり暮れて、小徑に喘ぐ小車の轢し、苦力の悠暢な掛け聲も聞こわなくなつて、あたりはひつそりして終つた。

『私そんな事解りません』

ミ、おづく答る聲は顔で居た。

『解らん事は無い、僕ミあなたミ夫婦になりたいのだ』

ミ、重ねて壓しつけるやうに言つた。彼女は恥しいやら、恐ろしいやら、一種云ひ現せぬ情なさに、涙さへ浸んだが、

『こゝにお金があります。是を差し上げますから、許して下さい』

ミ、泣き聲を出した。

『俺ば物盗りミは違ふ。お金なんか欲しくは無いのだ』

ミ、受取らうミは言はなかつた。

わい、儘よミ思つたので、突然籠を抜け出した小鳥のやうに、飛び上つて夢中に馳驅した。胸が苦しくなつたので立ち縮んで、ホツミ、一息ついた時に暗闇からムズミ織い彼女の手を握つた者がある。ギョツミ驚いて顔を見るミ、それは又あの注油方の男であつた。驚いて、振り切らうミしたが、彼も要領して固く握つて放さなかつた。

彼女は恐ろしい男の執念を始めて知つて、全身は只、慄る／＼顔でてる許りで

あつた。彼女は泣いて哀願したが、許されずに到々地上に押し倒された。それで死力を盡して抵抗したのも半ば夢心地であつた。何だか、強い壓迫に身を裂かれたやうな、苦しみを受けて、キャツミ叫んだ時には男の姿は闇の中に消れて終つた。彼女は恥しい傷を匿くして二三日の後工場へ出たが、もう其の男は他の工場に行つたのか、姿は見えなかつた。

彼女は悪魔拂ひをしたやうな心地になつて、始めて晴れた青空を見る思ひがした。彼女の遭難はそれだけで終りを告げたのでは無かつた。幾月も平和の日は續いて、且て受けた痛手の殆ど忘れたと思ふ頃であつた。彼女には許嫁の間柄である和子と云ふ男との結婚の申込を受けた。然し彼女は、男の暴力に虐けられた涙の末だ乾かない時であつたから、男との交渉は一切反對であつた。又、彼女の両親も、末だ年若い娘を手放すよりは、今少し家計の援助をさせたかつたので、今速ぐと云ふ彼等の申込を謝絶した。

さうかうする内に、その年も暮れて、乾坤旋轉、曠莫とした平原にも新春は訪れた。蘇州河の畔り、彼等のいぶせき藁屋の軒にも、紫雲搖曳の瑞雲立ち籠めて、家々には紅燈をかゝけて、團樂し、戸毎に紅紙を貼つて、新しい年を祝福した。

彼女も新しく迎へた十七の春の多幸ならん事を神に祈つた。

聽て、新柳の糸にも緑の仄が見えて、早咲きの桃さへ蕾を解く頃となつた。

彼女は相變らず、工場の方へ孜々として、倦まずに勢を出して通つた。

春は云ひ乍ら、さここなく吹く風の底冷々を覺ゆる頃であつた。突然家から工場の方に彼女を迎へる使が來た。突然に呼びに來た理由の何であるかは彼女には解らなかつたが、別に氣にも止めずに、その日は中途退出の手續をして貰つて、門を出た。冷りこした風に後れ毛を弄られ乍ら、家からの使と云ふ人の待つて居る所迄來た時に、彼女は不審を抱き始めた。迎へる人云ふのは名も知らず、顔も見た事の無い人であつた。彼女は二三歩遶巡りいて、引き返へさうとした殺那、彼女はそ

の男にウンヅミ、引き摺られた。彼女は始めて瞞された事を知つて、大聲に救を求めたが、大勢の人々は口々に、

『嫁奪ひよ』『嫁奪ひよ』

ミ、見物するのみで、助けの手は來合なかつた。其の男の外に末だ二三の屈強な若者の加勢者があつた。其處に待ち合せて居た車夫までが、彼女の手取り、足取りして、女の身體を車の上に押し上げた。その大男に抱きすくめられ乍ら、車はひた走りに走り出した。

彼女は車上に悶々藻騒くのみで、如何にも詮術なく、運び去られてしまつたのであつた。

あゝ忘れもせぬ三月廿日の夜。此の夜こそは終生忘るゝ事の出來ぬ彼女の悲しい思ひ出の夜であつた。父を呼び、母を呼んで、悲傷涙語する哀れな捕れの身を、情け用捨も無い獐惡な惡魔の爪牙によつて、落花狼籍の責め苦を遁れるよすがもなく、無

慘な犠牲ミなつて、貴い花の蕾を散らして終つた。慙うした、波瀾によつて生れた二人の間柄は、餘り幸福でもなく、今日迄續いたのであつた。

五

『首尾は上々の吉左衛門、器量は天下の一品で、今宵は丁度満願の思ひ叶ふたこの逢瀬、チリチリ、シャン／＼、ドロドン／＼』

『之れ、さ、何を八釜敷云ふのだね』

『何だつて、いゝじやないか』

『早くしなくちや、後手踏むここよ』

『そんなに速ぐこたあねエだ』

『あれ、嫌だよ、そんなに落ついてさ』

『姐さん、スツカリ参いちやつたね』

『知らないよ』

『おや、怒つたかい』

此の時聞き馴れた、聲音がした。

『おや、宅が歸つたやうだ』

『ウエー、そいつは情ねね』

阿大は飛び上つて驚いたが、逃げるに窓は無し、入口一つの袋小屋。これは慥うして居られないと、立つたり、坐つたりして焦つて見たが、今は絶對絶命の斷末魔となつた。女は氣を揉んで、

『暫くの辛抱だよ、臥床の下へ、早く、早く』

『おや、窮すれば通づか、是れぞ、只一方の血路なれか』

『何を言ふんだね、この人は、早く、早く』

『うわつ、こりや、犬並みじや無いか』

『まあ、一寸の間の我慢だ』

『助け舟を頼むぞ』

『だまつて、早くつてば』

阿大が平蜘蛛の様になつて、泥の上に潛り込んだ時、和子は這入つて來た。

『こいつは堪らねえ、俺の背中の上で、お祭り騒ぎをやられた分にや、やり切れねえだ』

二人の話は筒抜けに聞けて來る、果ては身體を動かす毎に、強い震動が應じて來る。

『箆棒め、餘り急がすものだから、腿帯まで括り忘れて來ちやつた。おまけに袴子も履き損つて居やがる。何だかかう尻擦いと思つたら、犬の畜生がべら／＼と舐めやがる。ウフツ、こりや叶はねえ、擦い』

身動きならぬ、床下の阿大は、犬の洗禮を甘んじて受けねばならぬ苦しいお刑置

きの身であつた。犬は顔ミ云はず、身體ミ云はず、舐め廻す心地の悪さ、こんな苦しい目に逢つた事は生れて始めてであつた。

『おや、此の腿帯は誰のदैいつて、呶かしてやがる。こりや困つたぞ』

ミ、蒼くなつたり、赧くなつたり、心配の絶間が無い。

和子がうまさうに高粱の喇叭呑みやれば、下の方では咽がゴクリミ鳴る。

『こりや全く困つた事になつたものだ、一ミ時も早く助け給ね、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛』

ミ、心の中に念じて居るが、二人の話は一向切れそうにも無く、果ては、仲よく
ヅシリミ、臥床の上に轉んだ様子だ。

『もう一ミ息の我慢だ、今が峠であらう』

ミ、思つて辛抱して居たが、横になつては又、古い昔の話を繰り返し、巻き返して、一向眠る氣配が見えない。

『こいつは弱つた。娘子も俺の苦しんで居るのを知つてゐる筈だに、よい加減に切り揚げて呉ればよさうなものだに』

ミ、果ては怨めしく思つて來た。そして急に自分の家の事も氣になり出した。唾を呑む音さへ、控へ目にせなければならず、身體は節々痛んで來る、

『何の因果でこんな凄じい業を曝さねばならんか』

ミ、男泣きに泣かん許りであつた。

處で、嬉しや、微かに和子の寢息が洩れ出した。

『占めたつ』

ミ、思つたが、扱て又、

『さうして遁れやうか』

ミ、云ふ心配が起り始めた。

ふミ、自分の腕を握つて引つばる者があるのに氣がついて、

『扱ては、娘子の助け舟か、あゝら、有難や、辱けなや、愈々放免の時が来た』
と、喜んで、ソーツミ、這ひ出した。

彼女は静かに戸を開けてやつた。

阿大はほうくの態で四つ這ひの儘で飛び出して、ホツミ、一息ついた。

朧る月さへみじめな彼の姿を哀れと思つてか、むら雲の中にその光を匿して終つた。

六

定め無い此の邊の氣候は星に暮れ、月に更けた夜でも、明日には灰色の雲の重りが低く垂れて、瓦斯糸のやうな春雨さへ煙るのが例であつた。

明日の休日にはミ的込んで、待つた甲斐も無く、壺を被せた様な陰惨な空模様であつたので、思惑が外れた軽い失望に業を煮やして、和子は布圍を又引き被つて二

度寝した。宵の疲れが繊弱な女の身を痛めたものが、娘子もしぎけない姿態を露はにして、暫く身を容れるに足る、傾いた臥床の上へ、盛り上げられた襦袢と一緒に、夫の頭に背を押し附けた儘、煮いた様になつて寝込んで居る。

昨夜阿大の這ひ出た床下からは朧乍ら、大きな手象や、足跡が、亂雑に印せられて、注意して見るに、只事で無い事件でも想像されるかのやうに見わて居る。小灯は覆つて僅かより無い油が、土間に浸み出てしまひ、高梁の堰は下に轉がつて居て、黒犬は狭い土間の半分以上を占領して長く脚を延ばして、物欲しさうにして居る。

川面を流れる積荷する苦力の哀つほい掛け聲が、備けに聞わて、濕つた様な朝の氣が、藁小屋の所々の隙間から冷やかに浸み入つて来る。

此の時、近所の男は藁の扉を破れる程叩いた。和子は先づ目を醒して、出て来た。

『やい、何時迄寝てやがるんだい。お天ミ様の罰を知らねわか』

『箆棒め、お天ミ様も糞もあるかい、八釜しい』

この時妻も目を醒して、目を磨りく／＼起きて来た。

『やあ、娘までが一緒か、呆れた野郎だ』

『時に朝から何の用事だい』

『何もかにもあるかい、貴様昨夜阿大と一緒に رفتらう』

『行つたがさうした』

『處で、阿大は昨夜歸つて来なかつたてねんだ。だから娘子の大心配さ』

『ね、つ、そいつは妙だ、早く歸つた筈だがなあ』

妻はギクリと胸に應じた。

『でも人の話では、貴様の家の中から話聲が聞けたてねんだがな』

ミ、言ひ乍ら、ジロリと妻の顔を見た。

妻は白刃を浴せかけられた様に冷りこして、思はず眼を伏せた。

『何んだこ笹棒め、まさか幽霊じゃあるめねし、来ない者の聲がする譯があるも』

んけね』

和子は氣味悪るけに振りかねつて、只ならず亂れて居る家の中を見廻した。

『それだこよいのだが、でも妙な事があるもんだ、じゃ又来る』

ミ、言ひ残して、其の男は去つて行つた。

和子は壊れた椅子にドツカミ腰を下して、腕を組んだ。

妻は蒼醒めた顔を懶けに伏せて、臥床に凭れた。そして狂犬に噛まれた後のやう

に嫌に頭が疼いた。

『おい、さうしたんだ』

『少し氣分が……………』

『何に、氣分が悪い、そりやいけねね』

『何にしろ昨夜は遅くまで喋舌つたから俺だつて氣分は良かねねだ、まあ大切に
するがよい』

妻の頬には涙が浸んだ。

『俺はまあ、ちよつくら阿大んごこへ行つて来るだ』

ご、言ひ棄て、夫は突然立ち上つて出て行つた。

妻の小さい胸は恐しい大事件の予感の様な悸ねが浪打つて、唇の色さへ變つて居た。顔ゆる體軀を支われず、危くよろめいて臥床の上から轉け落ちた。昨夜この地の上に這ひつくばつて、苦しんだ阿大が残した大きな足跡のマザ／＼に印されて居る土に頭を摺り付けて、考へに耽つた。

*

*

*

*

*

*

*

*

*

怎うして家に歸らなかつたのだらう。不思議な事だご思つた。死んだか知らし、いや／＼生きて居るに違ひない。死ぬ程の理由が無いもの、それごも病氣にでもなつて倒れたかしら、それだご自分に罪があるのだが、濟まぬ事をした。妾が、

阿大の無體を許容しやうごせなんだら、斯那事にはならなかつたかも知れん。それにしても、家に歸らない理由が薩張り合點が行かない。然し、歸らない理由の大部分は自分に關係無い事でもある様な氣もした。それは、總て彼の人自身が求めた罪であるご思つた。それに違ひない。それに相違ない。分自はあの場合彼を置いてやつた恩義さへ彼に與へてやつたのだ。それは彼の人から感謝を受けても、つゆ怨みを受く可き筈は無いご、結論を考へた時、彼女の萎れた心にも一脈の生氣が流れ始めた。

するご又、走馬燈のやうに昨夜寢床で回想した不快な思ひ出の糸が、又も、手繰寄せられた。

彼女は過ぎ去つた半世に二回までも傷つけられた悲惨な出来事が、先になつて浮んで来る。その内でも、今の夫から受けた慘酷な暴虐を悪くむ心はさうしても彼女の頭から拭ひ去られない。それは今に至る迄一否一一生を通じて忘れる事が出来な

いだらう。それで居て、自分を劬りかばつて呉れる日々の夫自身に對しては、又一種の愛着が深く根ざして居る。

彼女は慙うした愛憎二途の葛藤に苦しめられて、今に至るまで、遣る瀬ない悶々を包んで暮して來た。然し、世の中の男云ふ男は總てこんな暴虐な刃を胸に包んで居るものである云ふことは、彼女の深く信じ出した事であつた。過去の二度返も遭ふた悲しい災難を思ひ出す毎に、二度ある事は三度云ふやうに未だ此の後にも……………、時折り思ひ浮べては、慄然と顫ね上るのであつた。今も彼女は其の忌はしい予感に怯びやかされて、顫ひ上つたのであつた。

今度の阿大の一件が自分に禍する三度目の災難では無いかと、偶々、考へて見た。するさうやらそれが本當となつて、自分の頭に降つて來さうに思つてならないので、何となく夫の歸りが恐しい物の様な氣持がして又、深い穴の底へくゞ衝き陥されて行く様な暗い氣分になり出した。

彼女は頭ばかりが熱く火照つて肩から背にかけてゾツと、冷水を浴せられた様な悪寒がする。胸は絶え難い苦しさで浪が打つ。一層此の自分の倒れて居る大地を掘つて、其の温い土の下へくゞ降りて行けるものなら思ふ心になつて、阿大の殘して行つた大きな足跡にひたさ、獅噛み附いた。そして又考へた。自分は今迄に何一つ悪い事をした覺が無い。自分はいつでも男云ふものから苦しめられて來たのだ。全體此の世の中の男云ふものが皆悪いのだ。油注しの男だつて、夫の和子だつて、又今度の阿大だつて、皆私を苦しめる爲に此の世に生れて來たのかも知れない。一體女つてもものは皆弱いもので、慙うして男から虐けられて苦しむ云ふのはさういふ譯であるかを考へて見た。それは女云ふものは性が善である。男云ふものは性が悪であるを考へた。女は性が善であるから性の惡な男から虐けられるものであると思ふ外は無かつた。

神様は女云ふ者を拵へて之に善云ふ弱い性を吹き込んで、惡の強い性を持つ

て居る男と謂ふ者の爲に人身御供になるやうに造られて居るに違ひ無い。それは鶏だつて、豚だつて同じ事だ。鶏や豚は人間と云ふ者に人身御供になる様に造り上げられたもの、それで殺して喰つても罪は無い。だから男が女を喰つても罪はない。然し、然し、女は男に喰はれて甘んじてゐてよいものかさうか。鶏や豚は殺される迄、自分は人間に喰はれると云ふ事を知らないのだ。私は知つて居る。世の男は私を喰ふものであると云ふ事を。

彼女の五體は俄かに燃え上つて、狂ふ血が駈け廻つた。其のゾキン／＼と痛む頭は一層過敏になつた。彼女は立ち上つて血走つた眼で、邊りを睨みつけたが、又グンニヤリと倒れてしまつた。

私は強くならねばならない。

私は復讐せなければならぬ。

復讐だ——復讐だ——。

彼女は聲かに叫んだ儘、昏々として眠りに落ちた。

七

『なに卒倒した』

『おや大變だ』

『これは大熱だ、早く冷さなくちやいけない』

『其れ、早く提灯に火を上げろ』

『なに薬が通らん、それは困つた』

『それ箒を早く』

『鐘だ／＼』

病氣を聞いて三坪に足らん家の中へギツシリと、近所の人が這入つた。それが又、てんでな事を云つて立ち騒ぐ許りで、病人には一向適當な手當が出来て居ない。

臥床の四方には提灯が上げられた。病人の布團の上には箒や刃物を乗せてある。これは彼等の一番良い呪ひ方である。扱て、神に祈るもの、鐘を鳴らすもの、名を呼び続けるもの等、蒸せ返る程の騒々しさである。

道に、和子は不安げに枕邊に寄つて筆で病人の口に水を含ませて居る。かうして騒擾の一日は暮れて行つた。夜に入つて、彼女は漸く人心地がついた。人々は二人去り三人去つて、皆歸つて行つた。

妻は始めて口を聞いた。

『快いか』

『快くなつてよ』

『何しろ俺が歸りや、手前が引つくり返つてやがるんだろ、吃驚しちやつたね』

『さう、お前さん何時歸つたの』

『一ミ時たつて歸つて來たんだ』

妻は又晝の不快な氣持を呼び起されて、又々現實の悶々の中心迄引き出されてしまつた。

『じゃ、阿大の處はさうだつたの』

『何でも無いのさ』

夫の返事には屹度、重大なる事件を語るものと思つて慥り耳を欬て、見たが、嘔んで吐き出す様な夫の返事なので、何だか期待が裏切られた様な頼り無さを感じたが、それでもその方が自分には幾らか心安かつた。

『じゃ、阿大は歸つたの』

『ふむ、仕様のねエ野郎だ。一ぱし俺より先に歸りやがつて、負けつ腹立てたか、又茶館へ後から引き返して、酒喰ひやがつたもんだから、其處で、ふッ倒れて朝迄居やがつたらしいんだ』

『では今家に居るのだね』

『居るこも、今の先迄此處に居て手前の世話をして居やがつたつけ』
 少女は川底に沈んだ船の浮び上つたやうな嬉しさを感じて、心が急に晴れくゞ
 した。そして俄かに空腹を感じて、少量の食物を探つた。

其の夜は何事も無く明けた。翌朝一番雞の聲に目を醒して、和子は自身で炊事し、
 妻にも進め、近所の人に後を頼んで、自分は飯籠提けて工場へ出て行つた。時々隣
 の妻や、向ひの老人等が見に来て呉れる外極静かであつた。阿大の家内も時々見舞
 に来て呉れた。外には若人の唄が節面白く聞ゆる。

正月裏來是新春、家々戸々點紅燈

別家丈夫團圓聚、奴家丈夫造長城

二月裏來暖洋洋、燕子雙々到南方

新窠做得端々正、對々成雙繞畫樑

三月裏來是清明、桃紅柳綠正當景

家家放上飄白紙、孟姜坟上冷清々

五歳の昔別れて以來杳々して行き來を斷つた兩親は健在なりや、故郷の友は如何
 であらうか。偶々、思ひ浮べた時、何とも知れぬ熱い涙が枕を濡した。

扉が開いて突如枕元に現れたのは別人でない、そは阿大であつた。

『姐さん、ちつたあ快いかい』

『おや、阿大さんかい、——もう快い方だ』

『姐々、許して呉れ、手前の病氣は俺が悪かつたんだ』

『人にや言へ無ね事だが、お前の病氣を聞いた時、俺の此の胸の中は煮くり返る
 程辛かつたよ』

『そんな大きな聲をしちや他人が聞くよ』

こ、要慎深く外に眼を向け乍ら、聲を潜めて、

『お前こ云ふ人は何んて人に氣を揉ますんだらう』

『だからさ、此の通り詫まるんじやないか』

『さうじや無いよ、昨日の朝なぜ家へ戻ら無かつたの』

『昨日かい、さうでもいゝや、過ぎた事さ』

こ、莞爾こする。

『でも桂生が来て、手前の宅で話聲が聞けた』

こか、

『未だ戻らないから捜しに来た』

こか、

『聞いた時には、甚那に心配した事か知れやしない』

『だから鹽梅悪くなつたこ云ふのか』

『まあさうよ』

『じや勘忍してくんろ』

『詫びるにやあたらないよ』

『俺だつて随分酷い目に遭つちやつたものだ、考へて見ろ』

こ、聲を一段低めて、

『此の低い床の下へ平蜘蛛の様に這ひつくばつた儘、三時間許りも堪へて居たのだからね、腹は冷える、節々は痛む、おまけに犬の畜生までが顔こ云はず、尻こ云はず舐めるんだらう。唾一つ呑み込むのも遠慮しなくちやならず、俺はもう男泣きよ。お前に助けられた時は、半死半生だつたんだ。表へ出た事は出たんだが、腹は痛むし、頭が疼くんだらう。仕方が無いから茶館へ取つて返して一杯引掛けた儘、轉んでしまつた次第さ』

『まあ呆れた人だ』

『でも未だそいつが祟つて、身體が面白くねわて譯だ。だから、今日も仕事はやり切れねえで、午後尻を割つた次第さ』

『おや、さうかね、だから来てお呉れたのだね』

『まあそんなもんだ』

『もう快んだわ』

『まあ快くて結構さ』

『一時は全く夢中だつたんだがね』

『随分囁言なんか言つたよ』

『おや、さうかね、甚那事つたね』

『甚那事つて囁言だもの、譯の解らねわのがあたりまわさ』

『でも人の氣になるやうな事言はなかつたか知ら』

『誰も手前等の言ふ事を氣にするかい』

『それださ良いんだが』

『でも、復讐だ、復讐だつて言やがつたが、あれや何の事だかね』

『那樣事云つたの』

『何遍も言つたよ』

『手前よもや俺に復讐でもする氣じやあるまいね』

『さうだかねわ』

『笹棒め、俺こそさんだ酷いめに遭つちやつたんだい。復讐なんて俺の方の言ふ

事さ』

『おや、おや、阿大さん妾に復讐するつてのかね』

『あたり前よ、此の儘じや男の面がねわじやねえか』

『随分執念深いんだね』

『執念じや無いよ、執心こ云ふ奴だ』
『おやく、ごつちにしても迷惑な話さ』

此の時俄に工場 of 三番の汽笛が唸るやうに響いて、女の言つた言葉が、掻き消されてしまった。嗚り止むのを待つて、男は親指を立て、

『是れだ、退却するこしやう、大切にしな』

『有難う』

男はアタフタミ出て居つた。

八

『何處へ行くんだね、お前さんは』

『何處だつて良いじや無いか』

『だつて毎晩の事だもの』

『毎晩行かうこ、隔晩行かうこ、貴様の知つた事じやあるまい』

『さうさ、妾しやお前さんが居やうが、居まいが、一向差支ねはありやしな』

『だからさ、八釜敷く言ふでねわだ』

『處で世間の口は黙つて居ないからね』

『わゝつ、誰か何こか言つたかな』

『妙な噂も無いこは無いんだ』

『それ、甚那』

『お前さん茶館で遊んで速ぐ宅へ歸らねわて』

『わゝつ、何だこ』

『歸るにや、歸るが這入り口が違ふてさ』

『だ、誰だいそんな事呶す奴は』

『誰でもいゝじやないかね、お前さんさへ心に問ふて見て、そうじやなければ、』

いゝじゃないか』

『だけれども、那樣人の悪口を呶す奴は棄てゝ置けねわだ』

『棄てゝ置けなきやぎうするの』

『まあ、いゝや、手前誰から聞いたんだ』

『誰だつていゝじゃないの』

『いや勘辨ならねゑ』

『じゃ勝手にするさ』

『笠棒め、言ひ出して尻を匿す奴があるかい』

『じゃお前さんだつて何處へ行くんだ、匿すこたあ無いから云つておしまいよ』

『何を匿すものかい、茶館に決つてら』

『茶館を出てからの行く處をさ』

『な、何だゝ笠棒め、馬鹿にするない』

『孰方が馬鹿にするのだからねわ』

『じゃ、俺が何處かへ寄るつてねんだね』

『さうさ、お前さんの心に問ふて見るがいゝ』

『ふむ、そ、それお前聞いたのかい』

『聞いたから云ふのさ』

『だ、誰に』

『誰に聞かなくつたつて、亭主のする事あ、何ほ馬鹿な女房だつて知らねわもんかよ』

『じゃ、手前の推量かい』

『さうさ、神様から電話が掛るのさ』

『笠棒め、餘計な事を言つて、人を脅すもんでねわ』

『若い女が欲しけりや氣兼ねして隠れて行かなくつたつて、立派に自分の腕で貰

やいゝのさ』

『な、何ミ、餘計な焼餅焼くなよ、そ、そんな物焼いたつて、喰ねもしなけりや腹も太らねえだ。それより、さつき寢てしまへつて、こゝよ』

『おほきにね、お前さんがお前さんなら、こつちもこつちだ』

『おい、そんな大きな聲を出すでねエ、茶館で一ミ勝負やりや、速く歸つて來るよ』

『歸らなくつたつていゝよ』

『那樣こゝ言ふもんでねエだ』

『じゃ亭主の夜業の留守へ行かない事よ』

『な、何ミ、誰が亭主の夜業の留守の家へ行つただ』

『それはお前さんの心に問ふて見る事よ』

『手前、何故に那樣平云ふのだ』

『馬鹿なりにでも、眼が二つあるからね』

『じゃ、手前は俺が遊びに行く云ふ證據があるかい』

『證據はお前さんの胸にあるこゝよ』

『笠棒め、勝手にしやあがれ』

阿大は怫然として家を出たものゝ、傷もつ足の心地悪く、女房の言つた事が氣になり出した。陰慘なる暗雲が低く垂れ込めて、風さへ冷やかに、襟もこを脅す夕であつた。船の燈火はうねうねと、長い線ミなつて、水の上に動いて居る。歸り遅れた鳥の一群が頭の上を鳴いて、急いで行つた。ほつ／＼と、冷い汗が頬にかゝり出した。

彼は何だか落ち着かぬ惶しい心地ミ、重々しい不快な心持ちミが、一所に化合して、何ミも名狀の出來ぬ遣る瀬なさを感じ乍ら、茶館の前に出だ。三分蕊のランプが明るく燈つて、出來たての塔餅の湯気が白く立ち上つて、眞つ四角なミの机の四

方にも若者が陣取つて居る。

彼は入口に突き立つて、中を窺つた。彼は實際の處、此の數日、茶館の中で、何一つ興味を感じた事は無かつた。唯乗合馬車を待つ間の如うな匆忙とした氣分で、茶を呑むか、酒をあふる位の事であつた。彼はそんな氣乗りのせない氣分で呆然と現れたのであつた。一整に颯と振り向ける一同の視線が、何と無く彼の胸に鋭く應じた。總てが静で、皆が皆まで黙り込んで居る様子が、又氣になり出した。今迄さんざん話題の中心となつて居た本人が、ヒョククリ出現した時、一同が周章して、口を喋くだけの様な氣分がすると思ふと、彼は一寸中へ這入るには面映い踏ひ氣が出て、あたりの寮位氣が毒瓦斯でもあるかの様に恐しかつた。さうかと言つて今更引き返す譯にも行かないので、財布を取出して、幾らかの買物をして、其れを紙に包んで呉れるのさへ、もごかしい氣になつて、焦か／＼と引き返した。

『おい阿大、ここへ行くんだ、まあ遊んだらさうだい』

ミ、呼ぶものがある。其の、

『ここへ行くんだい』

ミ、云ふ言葉が彼の胸には又、釘を刺されたやうな痛みを覺わした。

彼はソ、クサミ足を早めて、闇の中へ消れて入つた。蕭々として烟る五月雨に濡れそほち乍ら、人通りの尠ない、裏通へ／＼と取つて行つた。西から行けば極めて短い近道ではあるけれども、我が家の前を通り過ぎて行くだけの勇氣は、ミても無かつたので、態々裏通りを廻つて部落の東の端に出てから又引き返した。其處からは誰にも逢は無いやう、人の通り合さ無いやうにミ心に念じ乍ら、恐しいけれどもやはり懐しい例の家の前に來た。

例の小灯の火がチラリと漏れて、艶のある若い女の快活な様子を思ひ浮べた。するミ床の下で平蜘蛛の苦を嘗めた不快が速く附隨して浮んで來る。彼は冷水を浴せられた様な惡寒を覺わて、夢中になつて、扉に手をかけるや否や、矢庭に身を翻して

恐しいものに追駈けられた時の様に飛び込んだ。莞爾と笑つて迎へる女の顔に應じる餘裕も無く、行きなり、小灯の火を怖いものゝ様にフツと、吹き消わしてしまつた。そして二人は暗中に相向ひあつた。

暗將細語寄英才、 倚向人前莫亂開、

深夜香閨春不鎖、 月移花影玉人來。

九

『あれ、何だね、那様に鐵砲丸見たいに、飛び込んでさ』

暗闇の中でも濡いのある懐しい聲がするに、顔が見え無くとも、快い明るい氣分に立ち戻つて、

『いや、雨が急におつ被しやがるから』

と、言ひ乍ら、濡れた長衫を脱いで隅の方へ押遣つて、初めて落ついた氣分でバ

ツト煙草に火をつけた。

女は黙つて凝乎と紙巻の先を見詰た。それは丁度螢の尻のやうに赤く燃わたり、又暗くなつたりして、其先がバツと赤く熱した時には、男の顔の輪畫だけが、確然と見えた。男も煙草に紛らして妙に黙り込んでしまつた。

二人は話の緒を失つて、暫く極りの悪い沈黙が続いた。男は半分位吸ひさした煙草をバツと地上に棄て、大きな足でグツと踏み附けた。そしてそれを切つ掛けに、聲を落して、

『俺ら何だか、もう餘り來れない様な氣がするんだが』

『何故』

『此頃になつて急に怖い氣がさした譯でもねえが、何だかこう氣が咎める様に思つてなんねえだ』

『それは御互様よ』

『危い橋を渡つての藝當だからな』

『阿大さんは度胸が無いんだね』

『初手は随分氣が置け無くつて戯談も出たんだが、此頃になつて妙に浸りする様だ』

『さう言へばさうだね、此頃は妙に陰氣になつたのね』

『深くなりや情が増す、情が増しや本氣になる、本氣になつちや冗談も云へねわて事になるんだらうね』

『どうだかねわ』

『お前さんはどうだい』

『妾しや那樣事知らないよ』

『おや、水臭いんだねエ』

『孰方が水臭いんだか』

『さうして』

『氣のある時分にや、何だかだつて上手に持ちかけて置き乍ら、そろ／＼飽きが來る時分にや、怖氣がさしたミか、氣が咎めるミかつて、逃げを張るんだからね。さうせ男ミ云ふものはそんな者ミ云ふ事は百も承知はして居るんだがね』

『ば、馬鹿な那樣ミこがあるものかい』

『あるものかいミ、言つた處で事實が然うだから仕方が無い。さうせ女ミ云ふものは男の弄みに出來上つて居るのだからね』

『姐ミ、何だつて那樣事云ふのだ。何か氣に障つた事でも言つたかね』

『こりや妾の愚痴よ、氣に止めないでお呉れよ』

女は涕聲になつて涙ぐんで居るらしく思えた。

『又、お前さんに叱られるかも知れねエが、嬢が妙な事を言ふんだ』

『然うでせう、やつぱり嬢が大切だからね』

『お前、速ぐそれだから困る。話は話さして聞くのさ』

『だから聴いてゐるじゃないの』

『何だ彼だと言つた處で二人の間柄がバレちやお終ひじゃないか』

『極つた事よ』

『だからそれに就て心配するんだ』

『心配すること無いじゃないの、結局逢はない事にすればそれで良いのさ』

『姐ごは其の氣か』

『お前さんが其の氣しやないかね』

『どうしてだい』

『さうしてだつて呆れたもんだ、匿すよりは現れで、チャンと心の中が見透いて居るじゃないの』

『おやく／＼恐しい千里眼だ、處で其の千里眼は間違つて居らあね、逢は無い事に』

する氣なら黙つて道切りさ、斯うして人目を切り抜けて逢ひに来るからにや、そんな水臭い腹じや無いんだがねエ』

『そりやお前さんの勝手さ』

『じや姐ごは、さうすれば氣に入るんだ』

『じや聞くが、お前さんは正真正味此の妾を想つて居ておくれかね』

『勿論の事だ』

『弄び物や、騷り物にする氣では無いんだらうね』

『云ふにや及ばねわ』

『それだつたら、何も心配するにやあたら無いんだが、そこが頼り無いのさ』

『怎うして』

『お前さんの正眞の處がさうも、も一つ確りしないのだ』

『じや怎うすれば俺の腹が姐ごに解るんだい』

『お前さんが眞實があると言ふのなら、妾の言ふことも、婢さんの言ふことも、途が二つあるとしたら、妾の願ふ通りになつて呉れるだけの覺悟があるかどうかね』

『そりや勿論姐ごの言ふ通りじや』

『さうだかねエ』

『疑ひ深いのもよい加減にするがよい、本當に下らねえ』

『じや婢さんを棄てても、妾と一緒になる氣はあるかね』

『わゝつ、姐ごは其の氣が』

『勿論亭主は投げ出して掛つて居るのさ』

『ふむ……………』

阿大は腕を組んで深い思案に落ちた。秘やかな囁きは途切れて、五月雨の音が咽ぶやうに聞えて来る。

稍間を置いて、

『怎うだの、大層の思案だね。だから頼りが無いと云ふのさ』

『俺だつて婢なごは眼中にや無いんだが……………』

『無いんだが怎うだの』

『さう焦か／＼云ふもんじやねエ』

『じや、怎うださお言ひなの』

『俺だつてお前の云ふ通りの考さ、でもそう注文通りの筋道が運ぶか怎うだかね』

『そりやお前さんの覺悟次第さ。お前さんが意氣地無くつちや、何だつて彼だつておじやんじや無いか』

『さう一概にや言へねえだ。俺がいくら覺悟をして居たつて世間と云ふ恐しい奴が控ゐて居やがるでね』

『だからさ、意氣地が無いと云ふのさ』

『……………』
 『全くお前さんは薄情だよ。世間が恐しけりや、始めから手を出さなきやいゝのよ』

『……………』

『今更世間が恐しくなつて来た等ミ能くも云はれたものだ』
 女は涙聲になつて尖つてきた。

『そ、那樣に怒るものじゃ無い。まあ、心を静めて談さう。俺だつてお前さんミ誰に遠慮も無く暮せる身體だつたら、こんな結構な事は無いのだ』

『……………』

『けれごもお前さんには立派な主人があるだらう』

『そりや解つた事よ、始めから有るのだ。今になつて急に飛び出した人じゃ無いからねエ』

『さう大きな聲を出すもんじゃねわ。處でだね、俺ミしては、和子哥の耳に這入るのが、實の處恐しいのだ』

『本根を吐いたね。だから意氣地無いミ云ふのさ』

『……………』

『じゃ歸つてお呉れ、もう之れ限り手を切る事が孰方もの安全さ』

『歸れミ云はれりや仕方が無い歸るが、姐ご俺の腹の中を間違つて呉れては困るだ』

『お前さんの腹は充分解つたよ、女は弄び度し、親爺は怖しだらう。へ、へ、へン』

『じゃ姐ご俺は怎うすればよいだ』

『早く歸りやいゝのさ』

『姐ごさう怒るもので無いよ』

『妾しや、ちつこも怒つてるのじゃ無い。お前さんが宅の亭主を怖いミ云ふから

早く歸れ云ふのだ。此處へ來さへしなかつたら何も怖い事は無いからね』

『そりやさうに違ひ無いのだが、では姐ごの考は怎うなの』

『そりや妾にだつて、分別は無い事は無いが、それよりは先づ今言つたやうにお前さんの腹が頼り無いから話にならないのさ』

『じゃ俺は姐ごに絶対服従だ、さうぞ良い様に頼む』

『では阿大さん、改まつて考めて貰ふかね……』

『御機嫌が直つたか、これは嬉しや太后様のお覺ね芽出度いこの身體……』

『冗談で無いよこの人は』

『はいく』

女は言ひ難くさうに籠つたが、思ひ切つて、

『じや言ふがね、眞實の處妾はお前さんを頼りにして居るの、だから什麼事になつても決して見棄てはしない云ふ約束が出来るなら、私の身體は何時でもお前の

者よ』

『そりやもう譬へ此の蘇州河の水が逆に流れても、お天頭様が西から出て、姐ごさへ其の氣なら俺だつて切れる氣遣はねエだ』

『本當に其の氣なの』

『本當ごも、御念には及びませぬじや』

ミ、阿大は元氣よく胸を叩いた。

『じや萬一切迫詰つた場合だね』

『そ、さうだ』

『其の時は覺悟はよいの』

『そ、其の時は仕方がねエ』

『仕方、無いから什麼にするの』

『仕方が無いから逃げるさ』

「駄目、目駄、駄目、そんな腹だから……」

「逃げる時には斯ういふ具合に姐ごの手を引張つて一緒に逃げるまでさ」

こ、言ひ乍ら、女の手を慥に握つた。

「本當なのそりや」

「誰が嘘なんか言ふものかい」

「頼り無いからね」

「又始まつた。大丈夫金の草鞋だ」

「じゃそれに違ひ無いねエ」

「違ひ無いさも、幾度言つても同じ事だ。もうこんな殺風景な話は止さう。段々色氣が無くならあ」

こ、女の手をギュツと絞めた。女は黙つて阿大の膝の上に其の軟かい身體を寄せかけた。

蕭々として細雨の音は寂寞を破り、風さへ吹き募つて二人の暖い言葉は外に洩れ無かつた。

十

数日の後、月は無いが、星明りの夜であつた。赤い落暉の消ゆるのを待ち構へるやうにして、和子は妻を誘ふて外に出た。程離れた真茹の寺の鐘が微かに打ち顫えて、夜風は襟元をひや／＼と襲ふ中を、和子は足に任せて、ドン／＼と先に立つた。女の纏足の軽い蓮歩も中々追ひ纏るのには困難を感じる程彼は冷やかに、振り返りもせず道を急いだ。

彼女は喘ぎ／＼と追つて従つては居たが、夫の心持ちは、氣の早い彼女に充分解つて居た。そして目の前に轉開して來る場面も、充分洞察する事が出來た。彼女の心は鉛の様に重々しい不快に塞され乍らも、何も彼も、行く可き處に落ち付いて行くのだと云ふ或る斷念の氣分もあつた。

田舎にては、勿體なさ過ぎる様な高い石の橋を渡つた時、其の下に薄墨のやうな色をして暗澹と漂つて居る水に、キラ／＼と光る星の影がチラリと彼女の眼を曳いた時、淋しく渡つて行く夫婦の幻の様な影を眼ざとく認めて、彼女の眼にはうら悲しい涙が浸んで出た。

箒を立てたやうな柵の林の暗い蔭の、じめ／＼とした露に濡れ乍ら、潜り抜けるこゝ、又潤けた畑地に出た。モヤ／＼とした雲が次第／＼に寄り集つて来て、鏡の様な美しい空を掩ひ匿さうとして、纔に行く手に唯一掴み程の切れ目が残されて居た。そこからは美しい星の涙が屢叩くのを見られた。又壺を被つた様な林に這入つて、ガサ／＼と續いた竹藪の間を足許に絡む蔓草を踏みしめ乍ら、やはり無言で歩いた。竹藪が段々疎らになるにつれて、そこには幾つもの土饅頭や、長四角の棺箱が、雜然と置かれてある故地があつた。

和子は一寸立ち止つて、四邊を見廻したが、土饅頭の上にぐつたりと尻を下ろし

た。女も仕方無しに彼に並んで腰を下ろした。冷や／＼とした夜氣が下ろした腰のあたりから、段々身體に浸み込んで来る不快も、氣に止める餘裕が無い様な惶しい氣分に、胸が高鳴つた。

蘇州行きが汽車が、蠶々々後の林の蔭から二人を怖やかす様に響いて行つた。其の響きの一分、一分と、徐々に小さくなつて行くのを聞き食ふ様に、耳を傾けて居た和子は、其の最後の微かな響が、夢の中へでも消ゆ去つたかと思ふ頃始めて口を切つた。

『今宵は外でも無いが、お前に聞き度い事があつて、此處迄来たのだ』

男の言葉は大層革まつて、じり／＼と壓迫して来る強さを示すものゝ様であつた。

『はい』

女も革まつて、しほらしげに微かに應じた。

『お前も大抵は思ひあたつて居るだらうが、こにかくザツクに打ち開けて貰ひ度

ひのだ』

八〇

「はい」

「怎うだね」

「外でもねの事だが、お前の處作に就ての事なんだ」

「大低の事なら俺も黙つて我慢もするさ、だが今度許りは、さうはいけねえだ」

「和子は云ひ難くさうに口籠り乍ら、低い聲で言つた。

「是れだけは怎うあつても、お前の腹を聞かなきやならねわのだ」

「何をなの」

「呆けちやいけねわ、手前の覺わのある事さ」

「何だか解らないのねエ」

「何に、解らないさ、じや、云ふが、阿大さ切れる氣か、怎うかさ云ふ事だい」

男の聲は尖つて來た。女は吃驚したさ云ふ風に、

「え、阿大さ」

「然うよ」

「こんでも無い」

彼女は周障てたふりし一否定した。

「何に知らねえさな」

「手前の心に問ふて見ろ」

「そりや無理よ、妾の知らない事だもの」

「笠棒め、よい加減に馬鹿にする無い。手前のした事が、解らないと思ふのかい」
漸々肉迫して來たなと思つたが、さり氣ない風に、

八一

『でも、覺えの無い事を云へと言ふのは無理よ』

『な、何に俺が無理だこ、こ、こん畜生』

男は嚇つゝなつた。

『でも、何にが證據で那樣事を云ふの』

女も敗けずに戦闘の用意をした。

『焦那解り切つた事に證據も糞もあるかい』

『だから無理よ、證據が無いんだもの』

『笠棒め、證據さへ無けりや、悪い事したつて可いと思つてやがるのかい』

『……………』

『神様がチャンと見てござるの知らねえかい』

『神様なんて、妾にやありやしない』

『な、何だこ、神様が無えこ、じゃ、手前は怎うして生きて居るんだい。何も斯

も神様の御厄介になつて居る事を知らねわかい』

『そんな馬鹿な事をお云ひでないよ』

『は、わつ、こ奴め、ひぎい事を呶しやがる』

『じゃ、神様が何處に居るか見ゆるの』

『笠棒め、見ねわから神様よ、眼に見えたら人間じゃないか』

『そんな頼り無い神様は嫌ひよ』

こんでも無いと思つたが、話が段々脱線して行くのに氣が就いて、引き戻さうと
勉めた。

『神様の話は後廻しでもいいだ。手前の腹を割つて、早く綺麗に言つてしまひね

え』

『幾度言つたつて同じ事よ』

『笠棒め、強情張るか』

『元いのね』

『じゃ、痛いめに遭つても、口を揚げないよ云ふのだね』

『知らない事は仕方が無いよ』

『縦し、其れに違ひ無えか』

彼は立ち上つて、懐から麻繩を取り出して、今にも縛り上げんよ云ふ風をして威嚇した。女は平然として動か無かつた。仕方無いので男は又言葉を和けて、

『お前が隠しても、チャンミ解り切つてゐるのだ』

『.....』

『お前が一言、済ま無かつたよ、云つて呉れりやそれ迄さ』

『.....』

『怎うか匿さず打開けて呉れ。ね、ね』

男は今度は泣かん許りの涙聲になつて、

『今迄のお前のした事は、ちつとも責めも咎めもしやしねわのだ。只この先き間

違の無いやうに誓つて欲しいのだ』

女の雙頬には、ハラ／＼と玉の様な汗が溢れた。

『俺はお前が可愛いばかりに憚うして頼むのだ、よいか』

子供を諭す様に浸りよ云つたが、女は涙を流して、聞く許りで、一言も應へ無い。

『強情張るものじゃ無いや、俺はお前さんを他人に取られちや、一日だつて生きて居られねわんだ。怎うか此の俺を可哀想だと思つて、思ひ返しては呉れめわか』

男は諄々と言ひ、聲涙偕に下つた。女も潜々と言ひ入つた。

斷雲の切れめから流れ星が、火の尾を曳いて、彼方の森へ落ちて行つた。あたりは全くの寂寞さである。

二人は涙の沈黙に打ち沈んで行つた。いつくの廟から聞ゆるか、鐘の音が微かに顛りて、夜氣は俄にゾツと、二人の衿元を襲ひ出した。

和子は思ひ出した様に女の耳輪の下から覗き込んで、

『思案が附いて呉れたか』

『……………』

『わゝ、これ、思ひ返して呉れぬか』

『思ひ返すも、何もありやしないじやないの、全體妾の知らないことだもの』

『じや、怎うあつても知らないこと云ふのだね』

『はあ』

『ふむ』

和子は太い腕を組んで、深い思案に首を傾けた。

『じや、お前に見せるものがある』

和子は懐ろに手を突込んで、グイミ掴み出した物がある。

『之れは誰の物だい』

それは見覺のある阿大の残した腿帯であつた。和子の顔には勝利の色が耀いた。

『こゝ、これを知らぬわか、さ、誰の物だか云つて見ねわ』

女は顔を揚げて、伏目になつてチラリ見えて、ギクリミ、胸を躍らせたが、今は如何にも詮術ない確證品を掴まれて居るのであつた。

『おや、そゝそれは』

『おや、それも糞もあるかい、篋棒め、之れを突き出される迄何故、強情張りやがつた、この畜生め、』

『……………』

『貴様が白狀しなつたつて、これ此奴が證據じやないか、この極道め、』

『でも、それは誰のか、妾にや知らないよ』

女は空嘯いた。

『な、な、何だこ』

『……………』

『こ、これ知らねわいな、こん畜生』

和子は嚇き逆上して、矢庭に女の襟を引摺んで、避二、無二、頑強な拳を固めて、突き上げた。女は益々冷静に、和子の爲るが儘に任して、痛みを堪ね乍ら、觀念の眼を閉じた。

『是れでも、白状しやがらねわか』

『……………』

『こ、是れでもか』

和子は益々猛り立つて、女を訶んだが、死人の様にグツタリミ、地に倒れた彼女は固く口を噤んで、齒を喰ひ締つた儘であつた。和子は耳元に口を寄せて、

『うぬ、命を取られてもよいのか』

彼女は男をハツタミ、睨み上げて、

『い、い、命も何も勝手にするがよいさ』

仰向けに寢返つて、胸を突き出した。

『き、貴様は何處迄、この俺に楯を突く氣だい』

『わ、妾はお前さんに殺される迄……………』

『な、何と、殺される迄強情を張るこ云ふのか』

『……………』

『困つたものだ』

和子は又腕を組んで嘆息した。

漆の如くに眞暗な空には、星の瞬きさへ絶わて、大空を突き上げん許りにスツクミ、聳わた柵の骨格が、ウラ寒い夜風に梢を顛はせて、土饅頭の蔭の灌木の中をカサコソと、音を立てるのは、閑驚かされた鳥か、獸か、夜露にジツトリミ、濡れた二人は思ひ／＼の悶ねを抱いて、更けて行く夜ミ共に佇んだ。

『おい、これ、心を静めて聽いて呉れ、此の俺はな、こゝ五年の間一日も、お前を、に、憎くいと思つた日はありやしねんだ。さ、怎うして手前はそ、そんなに變つてしまつたんだい』

『.....』

『定めて悪い魔物が憑いたに違ひ無んだ。は、早く目を醒して呉れ』

和子は捧で涙を摩り乍ら、

『お、俺は憎くくつて、擲つた譯でねんだ。手前に憑いて居る悪魔を擲つてやつただ』

『.....』

『さゝ、早く目を醒して、起きて呉れ』

和子は死人の様になつて昏倒した妻を、靜かに抱ひ上げて、其の冷い頬に口附けた。女は尙も言葉無く、グツタリと、和子の膝に掩ひ被さる様に黒髪を亂して、冷

い體軀を寄せ掛けた。

和子は憐らしい我が妻の、惨しい姿にハラハラと、熱い涙を注いで、咽び入り乍らも、言葉を接いで、絶え入らうとする玉の緒を繋ぎ止め様とするかの様に、慥に軟かい身體を抱きしめて、

『手前に罪が有るさ云ふのではねだ。悪魔の憑いた心呼び戻せばよいのだ。怎うか醒めて呉れ、これ、此の通り頼む事だ』

和子は我こそ我が言葉に感激して歎歎した。

春風秋雨幾年の歲月、吊ひの花一つ無い幽陰の境に、空しい無縁の憐を止めた、無数の土饅頭や、半ば朽ちた棺材の散亂して居るこの陰惨な故地に眠れる幾十の亡魂は、此の生靈の囁きを何ぞ聞いたであらう。

天は語らず、地は應はず、潜々として流す憂悶の涙は、只靜な大地の亡靈の外に聞くものは無かつた。

『よ、よいか』

『……………』

『わ、解つて呉れたか、こ、これ』

天地は寂しして、梢を揺る風許りが冷やかであつた。

『これ、これ、これ』

和子は力強く女を揺つた。女は糸より細い睡眼を微かに開いて、何事か呟いた。

和子は弾じかれた様に驚きの眉をピリつかせて、

『な、何だこ、切れて呉れだこ』

『……………』

『よ、能くも、そ、そんな事云はれたものだ。ここまでこの俺を馬鹿にする氣か』

和子の胸には憤激の焰が始めて渦いた。

『そ、其れ正氣か』

『は、はい』

『うぬ、ぎ、怎うするか見よ』

和子は女を地上に抛り出した儘、ブル／＼と、身體を顛はして、怒り心頭に發した。

女は平然と男の顔を見詰め乍ら、石像の如く瞬き一つせなかつた。それで居て、眼には熱い涙の浸んで居るのが見わた。

『き、貴様は能くも、此の俺に煮湯を吞ませたな』

『お、お前さんは、五年前に能くも、妾を誂んだね』

『な、何だこ、五年前だこ、今になつて未だあの事を呟すのか、執念深い尼つちよだ』

『わ、妾は忘れてなるものか』

『わ、忘れねむいな』

『ふ、復讐よ』

『な、何、復讐だ』

『.....』

『貴様が復讐なら俺だつて復讐してやらあ』

和子の頭にはある恐しいき閃が、稻妻の様に走つた。

『こ、殺せ、殺せ』

女は絶叫した。男は嚇つゝ取り逆上して、夢中に女に掴み掛つた。女も奮然として喰ひ附いて来た。和子の頑強な手に驚愕んだ女の衣服は、ビリ／＼と破れて、白い軟かい肌さへはみ出した。和子は益々夢中になつて、其の軟かい五體を包んだ衣服を悉く剥ぎ除けた。可愛さ餘つて、憎さの百倍した彼の眼には、残忍な野獸に等しい本性が、燃わ立つて、憎い彼女を殺氣に燃わした眼で快く睨んだ。兼て威嚇の用に供した麻縄で、今度は本當に彼女を縛り上げて、手近の櫛の幹に慥と、縛り繋いだ。

今は觀念の眼を深く閉じて、痛さに齒を咬み締め乍らも、其の煽々とした白い肉體に喰ひ入る繩目の苛い虐げよりも、赤裸々に引き剥かれた醜い女の醜骸を曝す辱めよりも、彼女は只一ミ目、阿大に逢ひ度いと思ふ心の押へ難い悶ねに、足搔き苦しんだ。

萬頼寂として、只啾々の風の聲のみが、獨り梢に咽び戦いて、森羅萬象は唯黙々こ面を背け、世にも恐しい慘虐の場面を見るに耐へ無いものゝ様であつた。

哀れにも、か弱い女性の白い鬢に喰ひ入る幾重の縹緋の警めは、正に開いた花の紅が、馳て永却の大地の下に消れて行く泡沫の身となりて果てる、悲しい枷であるかと思ふに、身も世もあらぬ遣る瀬無い惱みは、忙はしう息づく胸の高い低い波立ちによつて、それ知られた。

『やい、畜生、思ひ知つたか』

惡獸の孔わる如くに寂寞の中に根太い聲が響くかと思ふ間もあらせず、彼の手に

した、太い枯れ枝で強か、擲ちのめされた。

其の骨の蕊まで浸む疼きは到底、若い女の耐ね忍び得る程度のもでは無かつた。續いて又一打、又一打、此の世からの地獄の責め苦も斯くやみ許り、彼女は裂帛の悲鳴を、更け渡る夜陰の陰惨なる雲間に絶えなく揚けたが、誰一人救ひの手は來なかつた。肉は破れ骨は碎けて、其の白い嬾やかな肉體は、見るく暗鬱な色の濁つた血に染められて行つた。彼は益々狂つて現ゆる暴虐を擅にして、ムラ／＼と、幡つた總ての憤怒の遣る瀬無い無念の幾分を晴す事が出來た。

彼は暫く目瞬もせず、殘虐の暴手の爲に頻死の喘ぎを微かに残して、蠢めいて居る白い胸のあたりを睨めて居たが、俄に立ち上つて、匆忙と暗の中に其の姿を匿してしまつた。

鬼哭啾々として故地を吹く血腥い春の夜風は狂暴な慘劇の哀れさを訴へて、梢を顫はし咽び泣いた。

十一

血汐に染つた枯枝を握つた儘、夜更けに阿大の薬屋を破れる程叩く者があつた。

それは別人では無い和子であつた。戸を開けて招き入れた家内は、其の殺氣立つたソハ／＼した様子の只事で無い事を早くも察したが、やをら豆ランプに灯を燈して、しぎけ無い寢亂れ姿を其の儘に、相對して坐についた。

恐しく底光りのする眼で、ギロ／＼屋内を見廻して居た和子は、血に染んだ枯れ枝を思ひ出した様に其處に投げ出した。家内はギョツミ、玉消けて、和子の顔を睨めた儘、頓に言葉も出なかつた。

『おい、阿大は居らんか』

『あの極道めは居りませぬ』

『おや、何處へ行きやがつたんだい』

『何處へ行つたやら、彼處へ行つたやら、薩張り手掛りがありません』
『ふん、妙だね』

和子の張り詰めた氣が、急に緩んで、

『水を、水を一杯呉れねか』

と、乞ふた。そして家内の取り出した土瓶の口から快げに吸ひ盡して、ボツと、
一息吐いた。

『居やがらねねは不思議なこんだ、一體全體、いつから居らねねのかい』
『宵に出たつ切りよ』

『じゃ、仕事には行つただね』

『さ、それも確は解り乗るのだが、多分行つて戻つたのだらうよ』
『ふん、』

『何だ、彼だつて、此の妾を袖にしては極道する人だもの。やり切れ無い事よ』

『さうだらう』

と、和子は大きく首肯いた。

『本當に淋しくつて仕様が無い』

と、嘔んで吐き出す様に女は云つた。

『淋しいのは御互様よ、俺も到々不貞腐れの癖を殺して來ちやつた』

と、平然と言ふ和子の顔を驚異の眼で瞞めて、女は戦き顫わつた。

『わ、わ、わ、ば、殺したまへ』

『さうよ、驚くことあねねだ、俺の顔に泥を塗りやがつた畜生だもの』

『まあ、可哀想に』

女は潜々涙を流した。

『阿大哥が家に居りや、少しや文句があつたんだが、居なきや仕方がねえだ』
と、投げ出す様に言つて、グツタリと後に靠れた。

『本當にお前さんも、此の先、淋しいだらうね』

『仕方が無いさ、御互様よ』

『妾もあんな極道は思ひ切る事よ』

『ふゝつ、お前さん迄が』

和子は又新しい事を耳にしたと言ふ様に面を改めたが、軀てハラ／＼と、熱い涙を落して、

『何も運命だ』

投げ出す様に云つてのけて、長い溜息を大きく吐いた。女は氣の毒さうにより添つて、

『ね、あなた、御互に行く末は長いんだから、力になつて下さいねエ』

『お前さんも、其の氣か』

和子は淋しく微笑んで、凝つた女の顔を覗めて、意味あり氣に口を噤んだ。

ほの／＼と東の空は白けて、一番雞の聲が力強く曉を告げ渡つた。

*

*

*

*

*

*

*

其の夜の出来事以來、阿太の姿は永久に部落から消れて、何處へ行つたものか杳として、消息すら斷つてしまつた。故地に痛められた女の姿も其の翌朝には消えて無かつた。只虐しい血の痕だけが、地上に痛ましい名残として、残つてあつたのみであつた。

風に顫わ戦く櫛の梢のみは總てを知つて居たであらう。

完



大正十三年七月十三日印刷
大正十三年七月十五日發行

定價 銀壹元五拾分
金壹圓八拾錢



著者 上海 桃 星 野 蘇 山
發行者 上海 至誠堂書店
印刷所 上海 蘆澤印刷所

賣捌所

上海閔行路 至誠堂本店
電話 北二七三八
上海楊樹浦路 至誠堂支店
電話 東二六三

總領事 矢田七太郎 序
商務官 横竹平太郎 序
マキユリ
取締役 佐原篤介 序

至誠堂 編輯部 編纂

忽再版

上海一覽

(附蘇州、南京、杭州、案内)

定價 銀一弗二十仙
日本金 一圓五十仙
送料 十 仙

本書は上海の行政状態、支那風俗、花柳界、交通状態等苟しくも上海に關する事情の一切を簡明に説明し旅行者の東道とし、又上海在住者の指針たらむとして編纂したる唯一の書也寫真版數十葉上海、南京、蘇州、杭州の精密なる地圖を挿入し卷末には上海を中心とし各地への汽車汽船時間表及運賃表を懇切に掲載しあり

▲上海日報評 當地閩行路至誠堂から「上海一覽附蘇州、杭州案内」が發行された、内容は上海の概説、上海居留地と縣城、浦東開北及び南市吳淞、行政概観、公共事業、交通機關、商工業、官公所其他、新聞雜誌、旅館ホテル各棧、上海居留民團、寺院及び日本人墓地、上海見物があり、附録として南京案内、蘇州鎮江案内、杭州寧波案内、汽車汽船時間表及び賃金表がある、最近の調査になつたもの各方面の重要事項は悉く網羅し上海及び附近の事情が一目瞭然である、中に數葉の地圖を挟み體裁また優美に出來て居る

▲大阪朝日新聞評 上海一覽支那上海の現勢から公私一切の重要建物、文化的諸機關の案内、附近の名勝地、蘇州杭州等の遊覽案内に至るまでを簡明に記述し寫真地圖等の參考材料も添へてある

▲大阪毎日新聞評 近ごろ上海の勃興は一の驚異ともいふ事が出来る位で、世界的大市場の一として、その貿易は全支那の半に近く、出入船舶紐育について世界第二に位するものである本書はこの上海に關して先づ上海の概説から、行政、公共事業、交通機關、商工業、官公所、新聞雜誌、上海居留民團、寺院等の事まで詳しく書き、更に旅館、ホテル客棧、市内の名所、遊覽場、娛樂場、花柳界、年中行事等をも記してゐるので上海案内として便利である、なほ卷末に附録として「南京案内」「蘇州鎮江案内」「杭州寧波案内」「汽車汽船時間表及賃金表」を添ふ

▲長崎新聞評 長崎上海間の日支聯絡航路開始と共に日本と支那との關係は益々接近密接の度を加へ日本よりの觀光客も日に増加の趨勢を示してゐるが今日迄適當な案内書がなかつたのは甚だ遺憾とする所であつたが今回上海の概説から上海居留地と縣城、浦東開北及び南支吳淞それより行政概観公共事業商工業等から上海見物の手引として最も輕便なものであり而も鮮明な寫真版多數に挿入してある

▲長崎日日新聞評 日支連絡航路の開始と共に上海との交通は愈益々頻繁を加へ觀光に商取引に彼此の往來客は此一夜航を利用することに依つて愈々最近して來た而も東洋一の大商港たる上海は相當完備せる案内書に依るに非ざれば一寸見當が就かない、本案内書は上海に於ける新聞取次店至誠堂の編纂に成り簡明を主として上海を總括的に紹介したもので大抵の事は求めて得ざるなく簡明にして要を盡し寫真版地圖に依つて足らざるを補ふて居る、殊に詳細電車賃金表や汽車時間及運賃表等は旅客に取つて重寶である

古河繁雄 著

少年
少女
ランニング

四六版
定價 銀五十仙
金六十仙

少年は直に大人の形小なるものと見るのは皮相の観である少年には少年特有の生理と心理があるから少年の運動を指導するにはその特殊なる點に注意を拂ひ極めて合理的方法に依らなければ有害なものとなる恐れがある古河君は立派なランナーで而かも永年小學校の教職にあつて少年少女の輔導教育に充分な経験を有する上競技は如何にせば又如何なる程度が最も少年少女に適するかを研究せられて居るのであるから此種の本を書かると最適任者の一人と云はなければならぬ
本書行交流暢而かも實地と理論とが氣麗な「モザイク」なりに整理せられて居り實際手をこつて指導せらるゝもの心地せられ同好の士に指導するものも指導せらるゝものも論なくフィールドにトラツクに一冊をポケットに入れて行つて實地の参考とするに於てに益する所大なりと斷言するを憚らない眞に小學兒童に適する競技法其他の良参考書である

本書特長

文章平易にして而かも系統的、合理的に編み日日の練習順序を明指し如何なる兒童にも了解し得る様挿畫を加へ其の懇切なる事他に比類なき良書なり尙卷末には各學校のランニング規則及ランニンググレード表を参考に便せり

發行所

至誠堂新聞鋪

電話 北二七三八

上海賣捌所

日本堂 內山書店
日東洋行 至誠堂支店

3237

終

